



容器包装プラスチック使用量 第二次自主行動計画を策定 2015年までに40%削減*1を目標(1995年比)

*1 製品出荷量あたりのプラスチック使用量(原単位)

日本石鹼洗剤工業会(会長・大池 弘一/日油株式会社 社長)は、2006年発表の第一次自主行動計画目標(主要8製品群*2で2010年までに1995年比30%削減)を達成しました。この活動をさらに発展継続するため、このたび、改めて第二次自主行動計画を策定しました。

今回の1995年から16年間のプラスチック使用量の推移ならびに、1998年以降の主要界面活性剤の過去13年間の環境モニタリングの結果等は『環境年報 2011年度版(Vol.36)』にまとめて掲載いたしました。

*2主要8製品群
ボディ用洗剤 手洗い用洗剤 シャンプー・リンス 洗濯用液体洗剤
柔軟仕上げ剤 台所用洗剤 住居用洗剤 漂白剤・かびとり剤

【1】製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)を、1995年比37%削減

<プラスチック使用量削減・取り組みの背景>

2006年6月、「改正容器包装リサイクル法」が成立し、容器包装廃棄物の排出抑制の促進が盛り込まれるなど、排出抑制(リデュース)の重要性が再認識されています。

当工業会は、1995年より容器包装プラスチックの使用量に関して業界全体での実態把握を行うとともに、会員各社において使用量削減に努力して参りました。

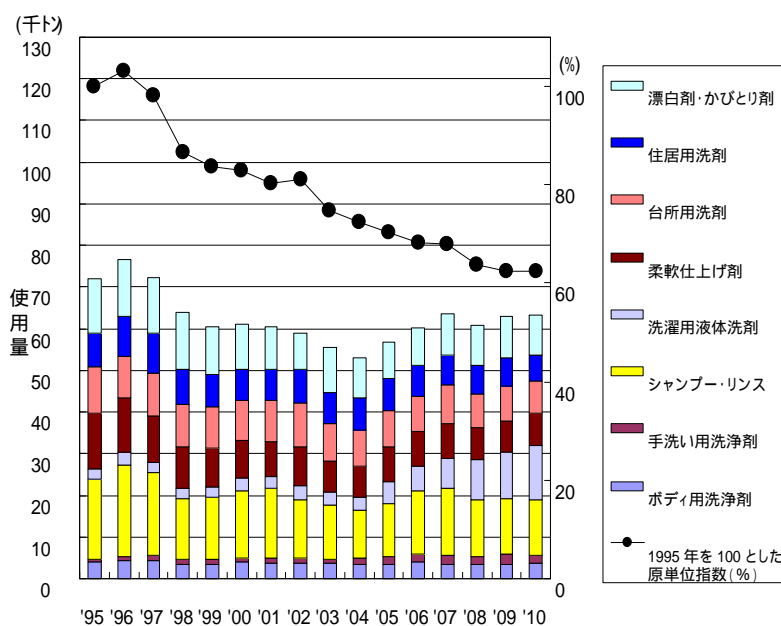
そして2006年6月、当業界の主要8製品群において、製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)を2010年に、1995年比で30%削減することを目標とする自主行動計画を公表し活動してきました。

<2010年削減実績>

2010年における対象製品群のプラスチック使用量は、63.4千トンで、製品出荷の伸びにより、前年よりも0.8%増加しましたが、1995年との比較では、12%減を達成しています。また、当工業会の自主行動計画の目標基準である「製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)」で見ると、2010年は、53kg/トンで、前年と同レベル、1995年比で37%減を達成しています(右図)。

こうした結果は、内容物の濃縮化による「コンパクト化」や、洗濯用液体洗剤などの「詰め替え用製品」および、スプレー付製品での「付け替え用製品」などの伸びにより製品あたりのプラスチック使用量が大きく削減されたことによるものです。

容器包装プラスチック使用量推移



< 第二次自主行動計画 >

2006年に公表した製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)を削減する自主行動計画は、最終年2010年に1995年比37%(目標30%)の削減を達成し終了することができました。

当工業会では、今後も引き続き業界としての役割りをしっかり果たすため、第二次自主行動計画を策定いたしました。新たな目標は、2015年に1995年比で40%の削減(2010年比では3%削減に相当)といたします。

【2】容器包装プラスチック使用量 削減事例集を公開中

当工業会では前述の通り容器包装プラスチック使用量削減に取り組んできました。その取り組みの具体的な事例を会員各社から集め、会員社のみならず業界を超えて参考にさせていただきたく、当工業会のホームページで公開しており、12月15日に新たな事例を追加掲載しました。容器包装プラスチック使用量削減の一助となればと考えています。

【3】洗剤成分の生態系影響に関する評価結果

当工業会では、洗剤の生態系(環境)影響の課題に対して、1998年から継続的な取り組みを続けています。代表的な4種の界面活性剤(LAS、AE、AO、DADMAC)^{*3}について、関東および関西の4河川^{*4}で、年4回の濃度測定による環境モニタリングを実施しています。今回は1998年度から2010年度までの過去13年間の測定結果に基づき、生態リスクについての考察を行い、環境への影響に問題のないレベルであることを確認しました。

^{*3} LAS: 直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム AE: ポリオキシエチレンアルキルエーテル
AO: アルキルジメチルアミンオキシド DADMAC: ジアルキルジメチルアンモニウムクロリド
^{*4} 多摩川、荒川、江戸川、淀川の4河川7ヶ所。家庭排水が流入する可能性が比較的大きいと考えられる代表的な都市周辺河川である。

< 界面活性剤の環境モニタリング結果と生態系リスク評価 >

LAS、AE、AO、DADMACの予測無影響濃度(水生生物への影響が表れないと予測される濃度)は、それぞれ270 μ g/L、110 μ g/L、23 μ g/L(SSD)、94 μ g/Lであることが既に報告されています。

2010年度の環境モニタリング結果は、1998年度~2009年度と同様に低い濃度を維持しており、それぞれの環境濃度は予測無影響濃度を下回っています(右表)。したがって、調査対象の河川においては、界面活性剤による生態リスクは小さいと考えられます。

なお、これらの界面活性剤の生態リスク評価に関しては、世界の洗剤メーカーなどが一同に会するCESIO2011(ウイーン)^{*5}や日本水環境学会^{*6}で発表を行い、石鹼洗剤工業会の活動の一部として公表しています。

^{*5} JSDA, River Water Monitoring of Major Surfactants and their Aquatic Environmental Risk Assessment in Japan, CESIO2011 8th World Surfactant Congress, Vienna, 2011.

^{*6} 日本石鹼洗剤工業会, 家庭用洗剤に用いる界面活性剤の生態リスク評価, 第45回日本水環境学会年会 2011.

日本石鹼洗剤工業会は、製品をお使いいただく皆様にさらなる安心をお届けできるよう、科学的調査・研究活動に今後とも積極的に取り組み、情報の開示に努めてまいります。

以上

界面活性剤の環境影響と予測無影響濃度の対比

項目	LAS	AE	AO	DADMAC
2010年度 モニタリング結果 (最小値~最大値)	4 ~ 18	0.03 ~ 2.0	0.01 ~ 0.07	0.1 ~ 0.2
調査最大値 (98年度~09年度)	81	31	1.9	3.8
予測無影響濃度 (PNEC)	270	110	50(モデル生態系) 23(SSD)	94

単位: μ g/L、: 定量下限値、: SSD(種感受性分布解析)

お問い合わせ窓口

日本石鹼洗剤工業会 (代表) 03-3271-4301